

土佐郡 布師田村 自然と歴史



気候 布師田地区がある高知市は、太平洋側気候のうち南海型に属し、年間平均気温は約17℃と温暖で、年によっては3000mmを越す降水量を観測する。日照時間は年間2000時間を超え、特に冬季の晴天が多いことが特徴である。

地形 地区は北部の山地と南部の平地に大別され、そのほぼ中央を国分川が南西に貫流する。平地は元来、国分川によって運ばれた土砂が堆積してできた沖積平野であるが、南西部は長宗我部氏以来、拡大していった干拓地である。



植生 北部の山地は元来、シイ・カシ類、アカマツを中心とした雑木林を基本とするが、戦後進められた山の開発に由来する人工林も一部に見られる。金山城跡の斜面に群生する孟宗竹は、かつて食用を目的に植栽されたものである。



はじめに

南国市と境を接する高知市の東端、高知城から約8kmの場所に布師田は位置する。北部の山沿いと地区の中央部を貫流する川の両岸に人家が集まり、平地の多くには水田が広がっている。

地区には、古代以来の遺跡や神社が散在し、古くから開かれた地であることがわかる。中世に造られた山城の麓には、江戸時代、参勤交代時に藩主が休憩する御殿が置かれ、村は宿場として繁盛したという。明治以後は、国道の整備や鉄道線路の敷設が行われ、戦後になると工業施設の建設、宅地造成等が進んだ。布師田の風景には、時代と共に緩やかに変化してきた村の歴史が反映されている。

そして現在、地区の中央を横断する新たなバイパス道路が開通し、大きな変化のときを迎えようとしている。

本号では、県都に隣接する、ある里分の二千年の歴史を振り返る。

布師田のあけぼの 〈弥生から奈良時代〉

弥生遺跡と布師田古墳群

浦戸湾の北西、国分川沿いの肥沃な地に布師田はある。この地に人々が住み始めたのは古く、遠く弥生時代以来の歴史が知られる。ミトロ遺跡(下附)では、堅穴住居跡や掘立柱建物跡、弥生土器などが出土しており、国領遺跡(小山)からも弥生土器が出土している。

古墳時代から飛鳥白鳳時代にかけての遺跡としては、七世紀前半のものも推定される布師田古墳群(西谷)がある。跡地は現在宅地となっているが、「二号墳」と「三号墳」とあり、「二号墳」には横穴式石室が設けられ、須恵器・鉄器の出土も確認されている。

条里制遺構と郡家比定地

布師田地区には条里制の施行が推定されており、また『土佐国風土記』逸文より、八世紀前半頃には、土佐郡の郡家が布師田付近に所在したことが推定されている。



長岡・土佐両郡の郡境を示す石碑
「従是西土佐郡」と刻まれている



ミトロ遺跡からの出土物
遺跡は布師田地区から南国市岡豊町の範囲に広がる(写真・高知県立埋蔵文化財センター提供)

布師の里の神々 〈平安時代〉

葛木の神と布師氏

平安中期、醍醐天皇の命により編まれた『延喜式』には土佐国内で二十一の神社が記載されている。布師田地区に鎮座する葛木男神社と葛木咩神社もその中にみえる。平安前期に編まれた『新撰姓氏録』には、「布師臣」は葛城襲津彦命の後裔とあり、布師氏が祖先神として祀った社が「延喜式」に見える葛木男神咩神社であったと思われる。また「布師田」という地名にも、布師氏がこの地に住したことが関係していると推測されている。(葛木男神咩神社の神社比定ならびに地名の由来については諸説あり)



『延喜式』巻10
葛木男神社と葛木咩神社の文字がみえる(国宝、東京国立博物館蔵)



葛木咩神社の故地(下附)
現在、祭神は葛木男神社と合祀されており、付近には「カツラキ」のホノギが伝わる



葛木男神社(西谷)
江戸中期、谷桑山が高皇産大明神社を「延喜式」所載の葛木男神社に比定した

里の古刹 〈鎌倉・南北朝・室町時代〉

土佐郷から「宮荘」へ

布師田地区は、平安中期から後期には「土佐郷」、鎌倉から室町時代にかけては「宮荘」と呼ばれた、現在の高知市「宮地区」を中心とした地域単位の中に含まれていたと推測されるが、資料を欠き詳細は不明である。

西山寺

江戸後期に編まれた『南略志』には、西山寺(西谷、真言宗)に関する古い記録が引用されており、永徳二年(一三八二)に、本尊聖観音菩薩を納める厨子が制作されたことなど、南北朝室町時代以来の寺の由緒が知られる。



西山寺の本尊聖観音菩薩と同寺の現況
西山寺は、古くは「七ツ城」(西谷)に所在したと伝えられる

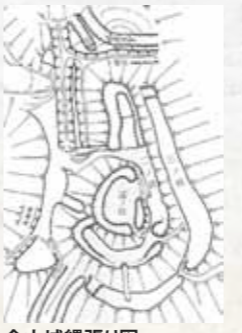
布師田の戦国 〈戦国時代〉

二つの古城跡と石谷氏

布師田地区には、戦国時代の城跡が二つある。金山城跡(西谷)と八頭城跡(地蔵堂)である。ともに城主は細川氏の末流という石谷民部少輔重信で、のち長宗我部氏に降る。現在、金山城跡には詰ノ段・標高二三・六三・ニフ段・三ノ段・土壘空堀などの遺構が残り、八頭城跡付近には、城堀ノ内・土居などのホノギが伝わる。

布師田の位置

戦国期の布師田を考える上で、長宗我部氏の本拠、岡豊城(南国市岡豊町)との距離感や地理的關係は重要である。江戸中期の軍記物『土佐物語』によれば、石谷民部少輔が長宗我部国親に降った背景として、布師田の南に接する大津城(高知市大津)・下田城(南国市稲生)が国親に落城されたことを挙げており、また安芸国虎が元親の岡豊城を攻めるに際し、大堀・篠原(南国市)方面より布師田の東方に出て、付近に火を放つことなどが記されている。岡豊城を中心とした戦国期的社会状況の中に布師田も置かれていたことが想像される。



金山城縄張り図
(高知市教育委員会発行「高知市の文化財」1992年より)



金山城跡を南方より望む
国分川を眼下にし、周辺を見渡せる好位置に金山城はあった



金山城跡から岡豊城跡を望む
金山城から東方約2.5kmのところ岡豊城はあった

長宗我部地検帳にみる布師田の風景

布師田の検地

天正十五年(一五八七)から、長宗我部元親は土佐一國にわたる大規模な土地調査(検地)を実施した。布師田では同十六年に検地が行われ、その台帳(布師田村地検帳)が今に伝わっている。布師田については、慶長二年(一五九七)の古塩田・新塩田地検帳ならびに元禄十年(一六九七)写の大塩田地検帳も残っている。

天正十六年地検帳

天正十六年(一五八八)の布師田村地検帳によると、田畠屋敷など、検地された面積は百二十二町五反余に及び、その約80%を田地が占めている。畠地・屋敷地はそれぞれ約6%で、水田を中心とした土地利用の様子が知られる。田畠の川成の合計は約4%と少ないが、地検帳全体に川原や川成、川荒などが確認され、国分川沿いの水損状況が推察される。



長宗我部地検帳(重要文化財)
原本の表紙と冊子の姿、土佐一國分368冊が伝わる



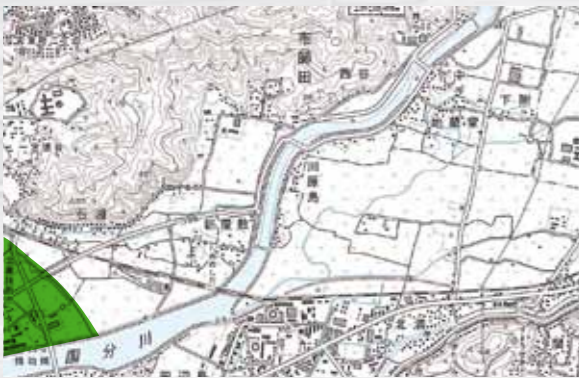
古塩田地検帳の冒頭部分
1筆目に塩入アレ、2筆目に塩ハシリの注記が見える



天正16年地検帳の冒頭部分
一筆筆を超える土地が検地されている

土地に対し権利関係を持つ者としては、長宗我部氏の家臣(久武内蔵助・福留半人・国沢将監・桑名丹後・谷忠兵衛ほか)が多く、続いて土佐国一ノ宮の土佐神社関係者(執行・神主・正祝・惣侍・伶人ほか)や、地域の寺院(西山寺・西蓮寺・定林寺・常通寺ほか)などが確認される。長宗我部氏の直轄地(散田)も九十筆を超える。特に、久武内蔵助の給地は多く、百三十筆を超える地が久武の給地として記載されている。久武は西谷の「七ツ城」に土居屋敷を構え、その南面の「西ノ前」に手作地を所持していた。彼が布師田の「代官」だったことも確認される(『秦氏政事記』)。

屋敷は、全部で百六十八カ所が検地され(その内、八十八カ所が居屋敷)、その多くは下附・地蔵堂・西谷付近に所在していた。また、前述の久武内蔵助の土居、同左衛門佐の土居、土佐神社の執行のものと思われる土居など、複数の「土居」も確認され、執行の手作地六ヶ所も記



天正16年地検帳に見えるホノギの多くが現在にまで伝わっており、長宗我部検地の復元研究が可能である
図中の網掛け付近には、古塩田・大塩田のホノギが残っており、400年前の開発を今に伝えている

塩田の地積合計	古塩田	15町9反13代5步	新塩田	25町6反37代3步	大塩田	12町7反19代	計	54町3反20代2步
古塩田概要	古塩田	検地地積合計	15町9反13代5步					
		内訳	作目	14町6反34代5步	塩ハシリ	1町	33代1步	
			堤分	1反30代4步				
			荒	15代				
大塩田概要	大塩田	検地地積合計	12町7反19代					
		内訳	毛付	10町1反19代2步				
			荒	2町5反49代4步				

宗我部氏が布師田で開発した塩田は、古塩田・新塩田・大塩田の三区分で整理され、検地された地積の合計は五十四町余に及んでいる。天正十六年検地の田地面積の半分以上の広さを、極めて短期間(慶長元年(二年)の内に、開発したことが分かる。古塩田・新塩田とも、開発された田地は全て長宗我部氏の直轄地(直分)とされ、古塩田ではそこに百姓が作職を所持しており、新塩田ではそこに「布師田衆」が扣地としての権利を所持していた。また、古塩田では四反前後、新塩田では一町前後の田地が多く開発されている。古塩田地検帳には、「塩ハシリ」「スナ入レ」「堤」などが詳しく記され、海水や砂の流入を防ぐため、堤を築きながら、田地を開発していた様子が伺われる。海辺部の低湿地における土地開発の困難さが察せられる。布師田の塩田開発は、長宗我部氏にとって、家臣団を維持・増強して行くための、また居城である浦戸城周辺の地域開発としての二つの目的を持っていた。塩田開発は、布師田の歴史に大きな足跡を残している。

短期間での塩田開発の背景には、豊臣秀吉による朝鮮出兵と、長宗我部氏のそれへの従軍という政治的動向が関係していたと思われる

明治～昭和戦前期

近代布師田の出發

布師田村は、明治二十二年（一八八九）の市制町村制施行を経て、昭和十七年（一九四二）に高知市に編入されるまで、江戸時代の村を引き継いで土佐郡布師田村として存在した。明治二十四年（一八九二）には戸数約三百、人口およそ千三百人を数え、江戸時代中期から大きな変化はみられない。しかし、自由民権期には布師田自由党が結成され、隣の一宮村民とともに減租請願書を太政大臣三条実美へ提出するなど、村人達は確実に近代日本の影響を受けていた。

西谷の変容

村役場は御殿跡に建設され、明治二十四年創設の布師田小学校は当初井流山南の中腹にあったが、明治四十五年（一九二二）に御殿山の麓に移転している。江戸時代、参勤交代の際に藩主が休憩した布師田御殿という「公的」な場所、近代の公的機関が引き継ぐかたちで置かれたのである。小学校は昭和四十五年（一九七〇・七六）の台風被害もあって、昭和五十七年（一九八二）に現在の場所に移転したが、御殿跡には現在も布師田ふれあいセンターと高知市農協布師田支所がある。



高知市農協布師田支所
(旧布師田村役場)



布師田小学校門柱
明治23年(1890)発布の教育勅語中の文言「啓発智能」(右)、「成就徳器」(左)が刻まれている同校が御殿山から現在地に移転した際に門柱も移された



布師田小学校 (明治末～昭和初期、個人蔵)

布師田の歴史資料

高知市立市民図書館には、明治から昭和戦前期までの布師田村関係の資料が百三十九点所蔵されている。この資料群は大きく分けて三つの性格に分類できる。一つは戸籍や入籍簿など村役場行政に関する帳簿類(約六十点)、二つ目は国分川水害予防組合に関する文書(約六十点)、三つ目は昭和初期の徴兵検査や簡閲点呼を中心とした兵事関係資料(約二十点)である。また、郷土的視点から布師田を記したものとしては、森澤富寿、森澤栄晴両氏の「布師の里」(一九八二年)や森澤栄晴氏の「嶺の水」(一九九九年)などがある。

国分川との関係

明治二十四年の布師田には百三十六艘の川舟が確認できる。この舟数は、村民の生活が国分川の舟運との密接な関係の上に成り立っていたことを物語っている。

その一方で、時として起こる国分川の氾濫は村に甚大な損害をもたらす。布師田村にとって国分川の治水は重要な課題であった。布師田地区には明治十年代から昭和初期にかけての水害予防組合の資料がのこされているが、それによれば、水害から村を守るために堤防や水門の整備保護が計られている。組合は国分川の「南岸」と「北岸」のそれぞれに設けられ、名寄帳や地租割帳などによって、村人達に負担が割り当てられていた。



国分川南岸水害予防組合書類
(高知市立市民図書館所蔵)

大正期の布師田

大正十年（一九二一）の統計によれば、二百七十七世帯のうち約三分の二が農家、昭和七年（一九三二）頃には、村の面積のうち約半分を田地が占め、九千石の米を生産するなど、大正、昭和になっても農村という布師田村の基本的な生産形態は変わっていない。

戦争の時代

近代日本の歴史は、戦争抜きで語ることはできない。「布師田村資料」(高知市立市民図書館所蔵)には、昭和十四年（一九三九）から同十七年（一九四二）の間の、戦没者村葬や徴兵検査に関する帳簿がある。例えば、昭和十五年の村葬関係資料によると、布師田小学校を式場に、無言の帰郷を果たした二名の村葬が行われた。昭和十六年の徴兵検査帳簿には、検査内容や実施に至る手続き文書が綴られ、村民十四名が現役兵として検査に合格したことがわかる。戦中日本の兵役体制とそれに組み込まれた布師田の人びとの姿が具体的に浮かび上がってくる。

日清、日露戦争から敗戦までに出征し戦死した布師田住民は六十二名にのぼる。この戦死者を慰霊するため、昭和三十一年（一九五六）に布師田郷友会によって忠霊塔が建立された。「忠霊塔」の刻書は吉田茂の揮毫である。この塔は御殿山から今も布師田地区を静かに見守っている。



御殿山に建つ忠霊塔

戦後～現在

新しい集落の誕生と人口増加

昭和五十年代には高知刑務所交通機動隊が相次いで布師田に移転し、職員住宅が造成されたことにより、新たな集落「宮ノ北」が誕生した。江戸時代より千二百〜千三百人と大きな変動をみせなかった布師田の人口は、これを契機に大きく増加し、以来現在まで二千人前後で推移している。

高知市と布師田地区の人口推移

年	高知市	布師田
昭和35年(1960)	196,288	1,309
40年(1965)	217,889	1,299
45年(1970)	240,481	1,229
50年(1975)	280,962	1,362
55年(1980)	300,822	2,015
60年(1985)	312,241	2,278
平成 2年(1990)	317,069	2,161
7年(1995)	321,999	1,989
12年(2000)	330,654	2,151
17年(2005)	333,484	2,249
22年(2010)	343,393	2,214

国勢調査、高知県企画部企画調整課編「高知県の集落」(1990年)をもとに作成

戦後の災害と対策

国分川をめぐる水害は、戦前より繰り返し布師田住民を悩ませてきた。戦後、昭和四十五、四十七年（一九七〇・七二）の豪雨により堤防が決壊し、水防のため西谷・新屋敷の河川改修工事が計画、実施され、それに伴って昭和五十八年（一九八三）までに布師田橋新屋敷橋の架け替えが完了した。また、住民の記憶に深く刻まれた災害として昭和五十一年（一九七六）の台風十七号がある。このときの雨量は、西谷・石測の山の土砂崩れを引き起こすほどで、布師田小学校の校舎裏山も土砂崩れの恐れがあった。そのため、昭和五十七年（一九八二）に小学校は現在の場所に移転した。

近年では平成十年（一九九八）にいわゆる「九八豪雨」が発生、甚大な被害を受けたことから、国分川・舟入川河川激甚災害対策特別緊急事業が採択され、大規模な護岸工事が進められた。

繰り返される水害と、その都度進められてきた河川改修・築堤工事は、地区の安全性を高めたが、その過程で国分川の景勝として永く親しまれてきた五水田の松が姿を消した。



五水田の松(上)と布師田橋(下) <ともに昭和32年、個人蔵>

大きく変わる布師田の風景

戦後の布師田には、交通網の整備や工業化の波が断続的に押し寄せた。大正十四年（一九二五）にはすでに鉄道が布師田を通過していたが、昭和二十七年（一九五二）には国鉄土讃本線布師田駅が開業した。

西部の塩田地帯では、昭和五十九年（一九八四）に高知黒潮博覧会が開催され、その跡地には高知県産業振興センターが設立された。昭和六十年代にかけては高知機械工業団地の稼働が始まるなど、工業振興地帯へと変化している。

さらに、二十一世紀に入るとJRR土讃線高知運転所(車両基地)が高知駅から移設され、平成二十五年（二〇一三）には地区を横断する国道百九十五号線(あけぼの街道)が全区間開通した。布師田の風景は高度経済成長以降の社会の動きのなかで、次々と変貌を遂げている。



高知ばさんセンター(上)とあけぼの街道遠景(下)

社会福祉と布師田

布師田には戦後社会福祉法人の運営による諸施設が設置された。児童養護施設「愛仁園」は、明治十六年（一八八三）創立の高知育児会を起源とし、昭和三十九年（一九六四）に布師田に開園した。運営母体である高知慈善協会の本部も平成二十一年（二〇〇九）より布師田に置かれている。昭和六十三年（一九八八）には布師田福祉会の「布師田保育園」が開園した。南海福祉会の介護老人福祉施設「グランポヌール」は平成九年（一九九七）に開設し、同十四年には天皇皇后が同所を訪問している。



田園より愛仁園(左奥)と布師田小学校(右)をのぞむ

村の姿

江戸時代の布師田村は、千を超える土佐の村々を代表する大村である。江戸時代中期の『土佐七郡本田新田地払帳(元禄地払帳)』によれば、村高平均二五〇石の土佐国にあつて、布師田村の村高は三二九・二石余、土佐国で第十三位、土佐郡では朝倉村、潮江村に次いで第三位である。潮江村と布師田村を大村たらしめる原因は、長宗我部時代から江戸時代にかけて進展した新田開発である。村高三二九・二石余のうち九〇〇石が新田であり、本田にも長宗我部時代の干拓

新田「古塩田」九〇石が含まれる。元禄元年(二六八八)に免奉行奥村安太夫が布師田の国分川沿岸の新田を調査、四八石余を打ち出したように、浦戸湾に注ぐ国分川沿いで新田開発が進んでいることがわかる。

寛保三年(一七四三)成立の『寛保郷帳』によれば、戸数二六七、人口一八一人男六二一人女五六〇で土佐国で四七位、土佐郡では四位の村である。ちなみに、馬五八匹・牛二八匹がいた。

この布師田村を「大道」が貫通、村内には御殿と送番所が設けられ、藩主を初めとする人々と物資情報が行き交った。

村の役人

村政は庄屋を中心に運営されるが、土佐藩の庄屋は転勤するのが特色である。布師田村では、長宗我部時代から約一八〇年にわたり岡本家が庄屋を勤めていたが、宝暦七年(一七五七)に同家が高岡村に所替になったあと、次々と庄屋が赴任・転勤を繰り返し、固定した家が庄屋役を勤めることはなかった。

『道番庄屋根居』等に見える布師田村の庄屋

任期	人物
天正元(1573)~寛永12(1635)	岡本源右衛門
寛永12(1635)~貞享3(1686)	岡本源右衛門
貞享3(1686)~享保5(1720)	岡本牛右衛門
享保5(1720)~享保8(1723)	岡本牛右衛門
享保8(1723)~宝暦7(1757)	岡本文助
宝暦7(1757)~不詳	島村嘉三右衛門
寛政12(1800)~文政4(1821)	奥田常右衛門
文政4(1821)~天保元(1830)	不詳
文政5(1822)以前	橋詰理作
天保元(1830)~天保7(1836)	武田勇次
天保7(1836)~天保13(1842)	不詳
天保13(1842)~嘉永元(1848)	橋田新左衛門
嘉永元(1848)~嘉永5(1852)	不詳
嘉永5(1852)~安政5(1858)	村山吉十郎
安政5(1858)	村山伝平
安政5(1858)~万延元(1860)	村山五之助
万延元(1860)~慶応3(1867)	竹中藤助
慶応3(1867)~明治4(1871)	不詳
明治4(1871)	前田貫次郎(郷長)

村の信仰

『土佐州郡志』が、寺院は西山寺、神社は式内社である葛木男神社と葛木咩神社など「公的」な神社を中心に記録するのに対し、『南路志』では、これに加えて、伊勢神宮の御師が札を祀った「二万度」や稲作を守る水の神である「神母」など、村人の日常に直結する神々が採録されている。特に神母は国分川沿いの本田三ヶ所所及び、村の神々の中でも特異な位置を占める。

『南路志』(1813年)のみに登場する神仏

神仏	場所
荒神	ノツコ山
若宮	新屋敷
一万度	石淵
一万度	セツ代
一万度	源右衛門塩田
一万度	喜兵次塩田
神母	30箇所
観音堂	石淵
住吉大明神	別当西山寺
蔵瀧大権現	石淵
地藏堂	下付
地藏堂	地藏

藤並神社への御奉仕

文化三年(一八〇六)に藩が設置した藤並神社は、藩祖豊夫妻と一代藩主忠義を祀った。大明神号を受けた記念として天保七年(一八三六)には城下で大祭が催されたが、布師田村からは「忠臣蔵夜討装束」に扮した行列が出された。



『藤並神社御奉仕絵巻』より

発掘された荷札

平成二十五年(二〇一三)、県市合築図書館建設地の発掘調査で、「武左衛門」布師田村」と墨書された荷札が発見された。布師田から城下への物資廻送を知らせる興味深い発見である。



追手筋遺跡出土木簡(写真・高知県立埋蔵文化財センター提供)

村の土地

本田には長宗我部時代に開発された干拓新田「古塩田」九〇石七斗七合が含まれ、土佐国西半分の真言宗触頭である常通寺の寺領と上級武士の知行に分けられ、残りは藩の直轄地である。

新田は上士には「役知」として、郷士には「領知」として宛行われ、残りには御貢物地として藩が直轄した。

横山新兵衛と

木市三郎は一木権兵衛を父とする兄弟であり、葛木男神社には、両名連名の棟札がある。

『土佐七郡本田新田地払帳(元禄地払帳)』(1600年代末)にみる布師田村

都合2292石1斗3升8合

本田1392石1斗4合(内90石7斗7合は古塩田)

100石常通寺領 50石今井左五右衛門知行
30石加藤六兵衛知行 15石横川市兵衛給
32石7斗6合損田引地 1164石3斗9升8合 御蔵知

新田900石2升4合

役知 41石4斗2升6合
横山新兵衛 衣斐寛助 下村市之丞 一木市三郎
領知 66石8斗5升
前田加介 安東小兵衛 横山権八 岡本彦十
国沢藤左衛門 横山六兵衛
御貢物地 791石7斗4升8合(久右衛門支配共)

知行:上士の本田 役知:上士の新田 領知:郷士の土地
御蔵知:藩直轄の本田 御貢物地:藩直轄の新田

置つけられ、年貢率が八割と規定されていた。

石淵の土居家の襖の下張りからは、国分川・布師田川・和食川・物部川の普請や藩主の鹿狩り、あるいは参勤道の整備や参勤通行などに関する人夫料(合計十九匁六分)上納の一覧が発見されたが、村で何が収穫されたのか、村人達の生活はいかなるものであったのか、それを復元できる資料は今のところ見つからない。

道と番所

布師田には、城下と土佐東部や北山を結ぶ往還「大道」が通っていた。江戸時代中期に藩が編纂した「元禄大定目」によれば、「大道」の幅は三間と規定されている。番所・御殿情報や物資の送達を担当する送番所が石淵に設置され、藩主休息所として御殿も設けられていた。



『元禄土佐国絵図』(高知市立市民図書館蔵)より布師田の部分

三家の墓 — 一木・横山・岡村 —

野中兼山は布師田村の用水路建設に注目、それを主導した。木権兵衛を土佐藩士に取り立てた。普請奉行となった権兵衛は、諸処の普請事業を完成させ、延宝七年(一六七九)、安芸郡室津港して果てたと云う。享年六三。跡は息子市三郎が継ぐが、宝永五年(一七〇八)に二木家は断絶した。



横山寛馬の墓



一木権兵衛と妻の墓

一木家と横山家

長宗我部氏に仕えた横山家は、一時浪々の身となるが、横山九郎右衛門が二代藩主忠義に召し抱えられた。九郎右衛門の娘は一木権兵衛に嫁ぎ、継嗣に恵まれなかった九郎右衛門は権兵衛の息子新兵衛を養子として迎えた。後に断絶する一木家の功績は、横山家により後世に伝えられた。



岡村十兵衛の墓

川と橋

布師田川は、鯉や鮒を特産とする漁業の川であり、材木などを運ぶ舟が行き交う舟運の川でもあった。また、刑罰関係の文書では「布師田川西限禁足」の用語が確認でき、布師田川の流れそのものが、罪人追放の境としての機能をもっていた。

橋は数度の架け替えが行われたが、「土佐州郡志」に記されるように、川を挟んで広がる村内の小村は、橋を起点とした方角で把握されていた。

万治元年(一六五八)、松村寛兵衛なる人物が、国分川左岸の堤防七百間の内六〇間に竹を植える申請をしている。これを許可した土佐藩は、いざという時は藩による利用を条件とした。



布師田御殿跡の石垣

結界の村

参勤交代で帰国する藩主の行列は、布師田村で衣裳を整えて、城下へ向かった。

また、六代藩主豊隆の遺骸が江戸から帰ってきた際には、布師田村の川原に小屋を設けて御棺を安置、ここで藩士達は旅装束を改めて、葬列を組んで城下へ入った。豊隆の死を悼んだ家臣斎藤甚五兵衛は、城下に入る前この布師田村で剃髪した。